

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## イギリス「社会」人類学の内実をめぐって： 2002-3年のケンブリッジを例に

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード: 社会人類学   理論   教育   セミナー   伝統<br>作成者: 名和, 克郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00003973">https://doi.org/10.15021/00003973</a>  |

## イギリス「社会」人類学の内実をめぐって

—— 2002–3年のケンブリッジを例に——

名 和 克 郎\*

On the State of British ‘Social’ Anthropology:  
in Cambridge 2002–2003, for example

Katsuo Nawa

This article provides an informal and tentative status report on British ‘social’ anthropology today, largely based on my very casual ‘participant observation’ of the Department of Social Anthropology at the University of Cambridge from 2002 to 2003 as a visiting scholar. After brief introductory remarks on the history of British social anthropology (as against American cultural anthropology) and the department, I point out two conspicuous traits of the department I observed. First, it is polycentric in that each of the three professors seems to indicate a different direction concerning the future of the department and social anthropology in general: recording, documentation and ancestor worship; transdisciplinary theoretical sophistication based on the British ‘social’ anthropological tradition; and a regionally oriented advanced study unit composed of anthropologists and scholars of related disciplines. Second, the recent systematisation of the curriculum (possibly due to the ‘audit culture’) and the internationalisation of the department seem to have lessened its particularity as a centre of ‘British’ ‘social’ anthropology. Even the long-established tradition of ‘Senior Seminars’ seems to have been almost imperceptibly eroding. If the British tradition of social anthropology is destined to melt into the larger field of anthropology (the World, European, Anglophone, or otherwise), it might be ancestor worship on the world wide web which serves most to uphold the venerable tradition of Cambridge social anthropology *qua* ‘social’ anthropology.

---

\* 東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門

**Key Words** : social anthropology, theories, education, seminar, tradition

キーワード : 社会人類学, 理論, 教育, セミナー, 伝統

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 はじめに                  | 4 ケンブリッジ社会人類学における院生教育 |
| 2 イギリス社会人類学とケンブリッジ大学    | 5 おわりに                |
| 3 ケンブリッジ社会人類学の教授達の目指すもの |                       |

## 1. はじめに

イギリス社会人類学の近年の研究動向を紹介するというのが、当初筆者に与えられた役割であった<sup>1)</sup>。ところが、筆者は学部大学院を通じて日本の大学に所属し、書き話し聞くという側面についてほとんど日本語を媒介として人類学教育を受けてきた、いわば日本製人類学者である<sup>2)</sup>。また、近年のイギリス社会人類学の展開をそれとして詳しく追いかけて来た訳でもなければ、イギリスの状況についてとりわけ熟知している訳でもない。そもそも、イギリス社会人類学の歴史と現状に関しては、20世紀後半の状況を概観し将来を展望するレビュー論文が世紀の変わり目に刊行されており (Macdonald 2001; Spencer 2000)<sup>3)</sup>、必要な読者はそれらを参照すればよい。

ここで筆者が行い得るのは、はるかに限定されたことである。筆者は、2002年9月から2003年8月にかけて、ケンブリッジ大学に滞在する機会を得た。ケンブリッジにおける最も正式の身分はクレアホール (Clare Hall) というカレッジ (コレッジ) の Visiting Fellow であったが、社会人類学科にも所属したため、学科内外の研究者が最新の研究成果を発表する毎週金曜夕方5時からのシニア・セミナーとその後のキングズ・カレッジ (King's College) のバーでの語らいにはほぼ欠かさず参加した。加えてケンブリッジでは何らかの形で大学に所属すれば大学の全ての授業を原則として受講できるため、これ幸いと社会人類学関係の授業やゼミを、院生気分ではほぼ毎日1つ以上受講することにした。筆者の滞在に際しいろいろと助けて下さったアラン・マクファーレン (Alan Macfarlane) 教授は、あるセミナーで院生に私のことを、「彼は日本の人類学者である。最近では人類学者も国際化しているので、彼はイギリスの人類学者をフィールドワークしに来たのだ」といった形で紹介した。これはいかにも彼の言いそうな冗談なのだが、私があまりに様々な授業やゼミ、研究会に頻々と顔を出すので、一部院生はほぼ一年間にわたりこの冗談を信じていたことが帰国直前に判明した程である。勿論筆者はイギリス社会人類学の教育過程についてそれと自覚して

フィールドワークを行った訳ではないし、個人指導、試験、学位論文の執筆と審査といった場、またスタッフ・ミーティングから採点にいたる場については参与も観察もしていない。それ故筆者の知見は明らかに限定されたものである<sup>4)</sup>。しかしここでは敢えてマクファーレン教授の冗談を半ば真に受けて、いわば秘儀伝授の場面には参加を許されなかった儀礼研究者の流儀で、当時ケンブリッジの授業やセミナーに出席しつつ考えていたことを軸として、21世紀初頭におけるイギリスにおける社会人類学の問題点の一端についてごく簡単に私見を述べることにしたい。

## 2. イギリス社会人類学とケンブリッジ大学

本題に入る前に、イギリス社会人類学とケンブリッジ大学の社会人類学科について、ごく簡単な背景説明を行っておこう<sup>5)</sup>。

イギリス社会人類学は、屢々アメリカ文化人類学と対比的に論じられる。だが、この単純な二項対立が隠してしまうものがある。イギリス社会人類学の圧倒的な規模の小ささである (Spencer 2000: 3-12; cf. Stocking 1995: 427-44; 中根 1987: 16-17)。例えば、イギリス社会人類学の博士学位はオックスフォード、ケンブリッジとLSE (London School of Economics and Political Science) を中核とする少数のトップクラスの大学により与えられてきた (Spencer 2000: 7-12; Hart 2004)。この3つの大学は「マサチューセッツ州の3分の1ほどの地域」にあり、しかもオックスブリッジとLSEの間には大学の基本的性格において極めて明確な差異があった (Leach 1984)。そして当時のイギリス社会人類学の大学院生や若手研究者は、これらの大学で開かれる偉大な社会人類学者によるセミナー (その嚆矢はプロニスワフ・マリノフスキー Bronislaw Malinowski のLSEにおけるセミナーである) を渡り歩いており、実際ほとんど皆顔見知りといってよい状態だったという<sup>6)</sup>。

しかもこの規模の小ささは、自ら選び取ったところのものでもあるようだ。よく知られているように、イギリスの人類学の研究者組織は Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland (RAI) と、2006年に設立60周年を迎える Association of Social Anthropologists of the UK and the Commonwealth (ASA、当初は Association of Social Anthropologists) との二重構造になっている。ASAの設立経緯を手がかりとしてイギリス社会人類学を巡る制度上の問題を論じたデイヴィッド・ミルズ (David Mills) によれば、イギリスの社会人類学は第二次世界大戦後の時期においても意思決定がごく少数の人間によって行われ、とりわけRAIとは区別される社会人類学者

の専門集団としてのASAの設立と維持にあたっては、誰をメンバーとするかについて議論と調整が重ねられてきた。マリノフスキーからラドクリフ＝ブラウン（A. R. Radcliffe-Brown）に訓練を受けた者という基本線にも拘わらず具体的な人選を巡って議論は屢々紛糾したという。そうした意志決定の背後には、コモンウェルスという枠組や社会人類学の大学院教育をイギリスで受けた外国人の問題以上に、人数的に言うところと圧倒的に巨大なアメリカ文化人類学の存在があった。実際例えば、ラドクリフ＝ブラウンのアメリカでの弟子フレッド・エガン（Fred Eggan）や、イギリスでも教えたことのあるデイヴィッド・シュナイダー（David Schneider）などは参加して貰っていても、マードック（G. P. Mardock）のような連中が大量にやって来たら我々は数で圧倒されてしまう、といった類の議論が、屢々実名入りで行われていたという（Mills 2003b）<sup>7)</sup>。

イギリス社会人類学の固有性をそれなりに保証してきたこうした少数精鋭的・エリート主義的な体制が、現在そのまま継続している訳ではない。大学における社会人類学のポストは確かに増加したが、それにもまして社会人類学者の数は着実に増加していった。社会人類学のポストに就けない一部の者は社会学のポストに就き、また多くの優秀な研究者がよりよき待遇を求めて大西洋を越えていった<sup>8)</sup>。オックスブリッジの大学文化も大きく変容した。イギリスの大学自体、とりわけマーガレット・サッチャー時代以降大きな制度的変化にさらされ、調査研究の為の予算は減少し、教員は増大する学内事務とオーデイトの重圧に直面するようになった<sup>9)</sup>。そうこうするうちに、かつては確固とした実在であるかのように見えたイギリス社会人類学というものの自体、薄暗闇の中で容易にはその姿を見出し難い状態になってしまったようにも見える。例えば、筆者が東京大学で受けた人類学教育においては、マリノフスキーから構造機能主義、リーチ、メアリー・ダグラス（Mary Douglas）、ロドニー・ニーダム（Rodney Needham）辺りまでの世代はイギリス社会人類学の文献が圧倒的に多く登場し、イギリスからアメリカに移ったダグラス、ヴィクター・ターナー（Victor Turner）、スタンレー・タンバiah（Stanley Tambiah）辺りを転換点として<sup>10)</sup>、その後はクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）、マーシャル・サーリンズ（Marshall Sahlins）以下アメリカの文化人類学者が中心になるという極めて明確な傾向が見られた。筆者がイギリスにこのこ出かけていった理由の一つは、自分の人類学的背景知のかなりの部分を占めている筈のイギリスの社会人類学が一体どこに向かっているのか、そもそもそのようなものが存続していると思えず事にどの程度の根拠があるのかを、単純に知りたかったことにある。

ケンブリッジ大学と社会人類学科についても若干の前置きが必要かも知れない。よく知られているように、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学は、全体としてカレッジと学部の二重構造をなしている。学生や教員の多くは、特定の学部や学科の成員であると共に、特定のカレッジの成員でもある。具体的に言えば、社会人類学科に属していた有力な人類学者の内、マイヤー・フォーテス (Meyer Fortes) やエドモンド・リーチ (Edmund Leach) はキングズ (リーチはこのカレッジの学長 Provost も勤めた)、ジャック・グディ (Jack Goody) やアーネスト・ゲルナー (Ernest Gellner) はセント・ジョンズ (St. John's) のフェローでもあった。現在社会人類学科に所属する Professor 3 人の内、アラン・マクファーレンとキャロライン・ハンフリー (Caroline Humphrey) はキングズのフェローであり、マリリン・ストラザーン (Marilyn Strathern) はガートン (Girton) の学長 Mistress をも勤めている。ただ少なくともケンブリッジでは、全てのスタッフがカレッジと学部の双方に所属している訳ではなく、正式の所属はどちらか一方のみということも大いにあり得る。

ケンブリッジの人類学に限っていえば、学部レベルで Faculty of Archeology and Anthropology があり、その下に3つの学科 (Department), Archeology, Biological Anthropology, Social Anthropology が存在する。加えて学部独自の図書館 (Haddon Library) と博物館 (Museum of Archaeology and Anthropology) があり、この5つから学部が構成される構造になっている<sup>11)</sup>。ただ、この学部という単位は、少なくとも客員研究員として滞在している限り、事務手続き上も学問教育上もほとんどお世話になることのない遠い存在であった。問題になるのは、ほぼ常に社会人類学科という単位だったのである。

これもよく知られていることだが、アメリカとイギリスでは Professor という語の意味合いは大きく異なる。ケンブリッジの社会人類学科が恒常的に持っている Professor の椅子は一つしかない。考古学人類学部に付いている William Wyse Professorship of Social Anthropology である<sup>12)</sup>。初代のトーマス・ホドソン (Thomas Hodson)、二代目のジョン・ハットン (John Hutton) は共に当時イギリスの植民地であったインド高等文官出身で、インド亜大陸に関する著書論文を残しているのだが<sup>13)</sup>、21世紀初頭において人類学史において特段注目されている人物ではない。だが、その後このポストは、イギリス社会人類学を代表する偉大な学者たち、マイヤー・フォーテス、ジャック・グディ、アーネスト・ゲルナーによって占められてきた<sup>14)</sup>。ゲルナーの後を継いで現在このポストに就いているのがマリリン・ストラザーンである。

ただ、実際に社会人類学科で Professorship を得たのはこの6人だけではない。例えばリーチは、彼のために作られた Professorship of Social Anthropology により一代限りの教授となった。現在の社会人類学科の教授の内、マクファーレンは Professorship of Anthropological Science (この名称と彼の研究に如何なる関係があるのかは今ひとつ判らないが)、ハンフリーは Professorship of Asian Anthropology (後に述べるように、こちらは名称と研究活動が見事に一致している) を有している。

こう見てみると、ケンブリッジで活躍した人類学者の多くは、社会人類学の教授職を得ていないことが判る。フレイザー (James Frazer) は別格としても、初期のケンブリッジ人類学を牽引したハッドン (Alfred Haddon) とリヴァース (W. H. R. Rivers), またその後も例えばオードリー・リチャース (Audrey Richards), レオ・フォーチュン (Reo Fortune), エスター・グディ (Esther Goody), ギルバート・ルイス (Gilbert Lewis) といった有力な人類学者が、Professor にならずにリタイアしている。途中までケンブリッジで教えていて、別の大学に転出して Professor になった人はさらに多いであろう<sup>15)</sup>。

ケンブリッジに出かける以前に筆者が漠然と抱いていたケンブリッジ社会人類学のイメージは、フレイザーを別格とするとハッドンとリヴァースによるトレス海峡調査がまずあり<sup>16)</sup>、その後特に第二次世界大戦後にはフォーテスとリーチの論争が端的に示すようにイギリス社会人類学のみならず世界の人類学の真の中心の一つとなり、その後もジャック・グディ、アーネスト・ゲルナーといった第一級の人類学者が教え、また現在のイギリス社会人類学を支える学者たちを育ててきた、世界の人類学の中核の中核の一つ、といったものであった。この印象は恐らく誤りではない。実際、1960年代にケンブリッジで社会人類学の教育を受けたキース・ハート (Keith Hart) によれば、当時の教師の中にはマイヤー・フォーテス、エドモンド・リーチ、ジャック・グディ、オードリー・リチャース、レオ・フォーチュン、G. I. ジョーンズ (G. I. Jones), レイ・エイブラハムズ (Ray Abrahams), エスター・グディ、ポーリー・ヒル (Polly Hill), スタンレー・タンバイアがおり、そこで博士号を取った者の中には、「ストラザーン夫妻 (Stratherens), ブロック (Bloch), クーパー (Kuper), パリー (Parry), グードマン (Gudeman), ハンフリー, ヒュー・ジョーンズ夫妻 (Hugh-Joneses), 後にはインゴールド (Ingold), フラー (Fuller), ハン (Hann) 等々」, イギリス社会人類学のある世代を代表する研究者の多くが含まれていたという (2003: 1)<sup>17)</sup>。そして、ケンブリッジの社会人類学科自身、自らのサイトの学科紹介の冒頭で、「この学問についてのイギリスにおける主導的な中心である。連合王国の最もよく知

られた人類学者の多くはここで教育された。学科は、革新的な第一線の研究に焦点を合わせている」と述べているのだ<sup>18)</sup>。因みにもう一つ先のページには、ケンブリッジにおける人類学の簡単な概説がある。そこでは最初に「現代人類学の偉大な発明は、長期間の現地におけるフィールドワークである」という一文があり、それを生み出したハドソンとリヴァースのトレス海峡調査について述べられた後、フレイザーを別としてケンブリッジにおける著名な人類学者として、第一に A. R. ラドクリフ＝ブラウン、第二にグレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson)、第三にマイヤー・フォーテス、オードリー・リチャーズ・ジャック・グディという一群のアフリカ研究者、第四に同様に偉大なアジア人類学の理論家としてエドモンド・リーチとスタンレー・タンバイアが挙げられている<sup>19)</sup>。社会人類学のポストに就かなかったハドソンやリヴァースが中心的な役割を与えられる一方<sup>20)</sup>、ホドソンやハットン、さらにリヴァースの弟子でケンブリッジで最初に社会人類学と名の付くポストに就いたアームストロング (W. E. Armstrong)<sup>21)</sup> の名前が登場せず、またゲルナーの名も見当たらない一方、ベイトソンが最上級の扱いを受けていることなど、この記述自体なかなか興味深いものなのだが、横道に逸れるのはこのくらいにして、次節では、ケンブリッジの社会人類学科において現在行われている筈の「革新的な第一線の研究」が何を目指しているのかを、ケンブリッジの誇る 3 人の Professor に焦点を当てて見てみることにしたい。

### 3. ケンブリッジ社会人類学の教授達の目指すもの

本節では、ケンブリッジ大学の社会人類学科に所属する 3 人の Professor が、研究者個人としてだけでなくケンブリッジの社会人類学科を支える者として、如何なる研究を行い、社会人類学を如何なる方向に展開させようとしているように見えるかを、筆者のケンブリッジでの見聞とそれぞれの業績、その他資料に基づいて簡単に論じてみたい。議論の要点は、3 人が目指している方向性はそれぞれ異なっており、それが現在のイギリス社会人類学の置かれた状況にある種反映しているのではないか、という点にある。

教授就任順に話を進めたい。アラン・マクファーレンは、社会人類学者としてはネパールのグルン (Gurung) の調査を長期間継続して行ってきた。その初期の成果であるモノグラフ (Macfarlane 1976) は、土地を計測し、系譜を取って様々な人口論的な計算を行い、家系の収支計算し、といった案配の本で、「構造から意味への転換」が喧伝されていた同時代のイギリス社会人類学にあっては異色の民族誌である。他方

彼はイギリス史の研究者でもあり（彼はイギリスのウィッチクラフトの研究によりオックスフォードで博士号を取り、その後にLSEで人類学の修士号、SOASで博士号を取得している）、とりわけ日本語にも翻訳された『イギリス個人主義の起源』（マクファーレン1990）で広く知られ、最近はいわゆる「近代」というものをめぐる比較文明史的な一連の議論を展開している<sup>22)</sup>。

その旺盛な著作活動にも関わらず、マクファーレンの社会人類学科内における研究者としての位置付けは微妙なものである。マルサスの人口論を一つの基盤とした彼の基本的な問題関心が多くの社会人類学科の研究者や院生とずれており、院生が自分の理論的な関心について彼と議論してもなかなか議論が噛み合わないこと、彼の近年の一連の比較近代論が英語の文献にのみ頼ったもので、また議論における単位設定の仕方が再帰性を欠いていること、などが理由として挙げられるだろう。勿論以上のことがそれ自体として彼の業績の否定に直ちに繋がる訳ではない。そもそも彼はイギリス社会人類学が「構造から意味への転換」を喧伝していたころにネパールの村の人口動態や家計、財産分与についての本を書いた人物であり、その基本的な理論的指向は一貫している<sup>23)</sup>。ケンブリッジ出身のある著名な社会人類学者の言葉を借りれば、「彼には彼の世界があり彼の読者がいる」ということなのだ。

こうした狭い意味での学問業績とは別に、マクファーレンが果たしたイギリス社会人類学に対する非常に大きな貢献がある。社会人類学に関する資料の整理と保存、歴史の記録といった作業である。彼が自分のセミナーの中で、フレイザーの取った『金枝編』続刊のためのノート、フォーテスのパイプ、リーチの定規、グディだかゲルナーだかの機の鍵といったアイテム<sup>24)</sup>を持ち出して院生にケンブリッジの歴史と伝統を強調するのはご愛敬として、例えば彼はグルン（彼が調査した人々）に関する若くして亡くなったフランスの人類学者の民族誌を英訳しているし（Pignède 1993）、デジタル・ヒマラヤというプロジェクトを立ち上げ、彼の師でもあった南アジアの「トライブ」民族誌学の泰斗クリストフ・フォン・フューラー＝ハイメンドルフ（Christoph von Fürer-Haimendorf）の残したフィルムをデジタル化したり、ネパールやブータンで刊行された入手困難な雑誌をpdf化して公開したりといった地味な作業をいち早く行っている<sup>25)</sup>。

歴史学者でありかつ人類学者でもある彼の特徴がよく現れているこうした一連の作業の中でも、社会人類学全体への最も大きな貢献だと思われるのは、多くの人類学者を映像で記録し、ウェブ上で公開するという作業である<sup>26)</sup>。ジャック・グディによって始められた社会人類学者の映像記録を残す試みは<sup>27)</sup>、マクファーレンにより大いに

拡張され、現在我々は居ながらにしてレイモンド・ファース (Raymond Firth), エドマンド・リーチ, ゴッドフリー・リーンハート (Godfrey Lienhardt), アーネスト・ゲルナーといった今は亡き社会人類学の巨人達が語る姿を見ることが出来る。勿論、いまだ現役で活躍中の社会人類学者や、イギリス以外の人類学者 (例えばフレドリック・バルト (Fredrick Barth), クリフォード・ギアツ, フィリップ・デスコラ (Philippe Descola), 周辺分野の研究者の動画ファイルも存在する。ただしマクファーレン教授自身の動画はいまだ置かれていないようである。

マクファーレンがケンブリッジ社会人類学において独自の、しかし周縁的な位置を占めているとすれば、マリリン・ストラザーンはケンブリッジのみならずイギリス社会人類学全体を代表する研究者だと言ってよいだろう (因みに彼女が講演している姿はマクファーレンの上述のサイトで見ることが出来る)。周知のようにストラザーンは、社会人類学者としてはパプア・ニューギニアとりわけハーゲン (Hagen) 社会の研究からスタートした。日本語に翻訳された「自然でも文化でもなく」(ストラザーン 1987) は広く知られている。その後彼女は、自身が「欧米の (Euro-American)」と呼ぶ知的伝統に立つことに自覚的でありつつその議論を例えば社会人類学とフェミニズムの議論とを対比させることで内部的に複数化し、さらにそれを彼女自身の構築物であるところのメラネシア的人格・交換のモデルと突き合わせて双方を多層的に批判するという知的力業を演じた難解なる大著 *The Gender of the Gift* (1988) を一つの契機として、多方面にその思考を展開させている<sup>28)</sup>。親族や文化と社会といった社会人類学に伝統的な問題群と、著作権、オーディット<sup>29)</sup>、科学技術研究、生殖医療といった多様な最先端のトピックが結びつき、さらにそこに学としての社会人類学及び「欧米」的知一般に対する批判的コメントが織り込まれている彼女の議論の全貌を紹介する力量は筆者にはない。いずれにせよ彼女の名声は社会人類学を越えて広がっており、筆者のケンブリッジ滞在中に開かれた社会人類学以外の学会やシンポジウムの基調講演に何度も呼ばれていた<sup>30)</sup>。さらにストラザーンはデイム Dame の称号を持ち、彼女自身の出身カレッジであるガートンの学長 Mistress でもあって、学内行政的にもイギリス社会全体の中でも顕著な地位を得ている。その背後には、朝食を食べながらビジネス・ミーティングを行い、月曜の朝9時から学部大学院合併の親族に関する授業をやった後、本格的にカレッジ学科双方の仕事をこなすといった生活と、外部評価や予算の問題でますます厳しさを増すイギリスの大学の状況をも自らの議論の構成要素として取り込んでしまう、抜群の知的体力と旺盛な好奇心があるようである。

ストラザーンの近年の業績の多くは、人類学の外部にわたる非常に広範な理論的な

展開を涉猟し、それを自らの議論の中に独自の形で取り込むことで形成されているように見える。著作一覧からも明らかのように、彼女自身、フェミニズムからアクターネットワーク理論に至る、社会人類学という制度的枠組の外部の様々な人々との知的交流を持ち、屢々共同研究をおこなっている。こうした姿勢は彼女のセミナーや授業からも顕著に窺えるものであった。ケンブリッジで筆者が一年を通して参加したセミナーの一つは、数年前に新設されたばかりだという博士課程1年目<sup>31)</sup>の人々のための通年セミナーだったのだが、彼女はそこで数名の担当教員の一人として5回のセミナーを担当した。そこで議論の対象とされた文献は、オーディットの話はもとより、ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) の社会システム論から、ブリューノ・ラトゥール (Bruno Latour) やジョン・ロー (John Law) のアクターネットワーク論、アルフレッド・ジェル (Alfred Gell) からアルトゥーロ・エスコバル (Arturo Escobar) のサイバースペースの話まで、極めて多岐にわたっていた。文化の著作を巡る議論とナンシー・シェパー・ヒューズ (Nancy Scheper-Hughes) の臓器売買についての論文を並べて何か論じなさいなどというそのセミナーは、魅力的であると共にその都度の知的集中を要求されるため、ケンブリッジの優秀な院生にとっても、実際に使われていた英語の表現をそのまま用いれば、非常に **demanding** なものであったようだが。

他方、多方面に拡大する知的活動にも関わらず、ストラザーンはイギリス社会人類学の伝統に属する研究者でありつづけている。その根本にあるのは、「社会」(或いは *sociality*) という概念を通してものを見ることへの信頼ではないかと思われる<sup>32)</sup>。何人かの院生や元院生から聞いた話では、大学院での研究計画などを持って行って彼女のところへ相談に行く場合、その中に社会との関連が記されていないと、一見彼女の問題関心と一致しそうな領域の研究であっても、「この研究をやるのであればアメリカの大学院に行かれたらいかがですか」といったことを言われてしまうのだそうだ。学問共同体の内部のみならず<sup>33)</sup>、その再生産の場においても、彼女は社会人類学の擁護者を自ら任じているのである。

この2人に比べ数歳若いキャロライン・ハンフリーは、非常に生産性の高い社会人類学者である。現ロシアのブリアート共和国の他、モンゴル、チベット、ネパール、インド等でもフィールドワークを行い、シャーマニズム、儀礼論からポスト社会主義の人類学にいたる様々な主題について優れた業績を上げている<sup>34)</sup>。彼女の業績の中では恐らく地域を越えて最も読まれているであろう儀礼化 (ritualisation) を巡る議論 (Humphrey and Laidlaw 1994) をはじめ、共著の形を取るモノグラフが多いのも彼女の特徴である。また、ケンブリッジを中心とした社会人類学者を糾合して作った幾つ

かの論集の共編者をも務めている<sup>35)</sup>。

ハンフリーの学科における公的な地位、Professor of Asian Anthropology という名称は、彼女の人類学者としての指向と、彼女がケンブリッジのなかで目指していることを非常にうまく表しているように思われる。彼女は、内陸アジアの社会人類学研究者、およびその周辺の研究者を組織して、Mongolia and Inner Asia Study Unit (略称MIASU) というものをケンブリッジ大学社会人類学科の内部に設立した<sup>36)</sup>。独自の図書室を持ち、このユニット所属の研究者を何人か雇っているなど、独立性の高いユニットである。モンゴルや中華人民共和国の大学と国際協定を結び、独自の雑誌を刊行するなど出版活動も盛んである。そして、毎年社会人類学科所属の院生の内数人が、このユニットの枠組を利用してフィールドワークに出かけていく。

地域的限定を付した上で多くの研究者を育て、国際的な共同研究を行えば、その地域を巡る社会人類学・及び周辺分野における研究水準が向上し、議論が洗練されたものになっていく可能性は極めて高い。私が滞在していた当時 MIASU の Director をしていたデイヴィッド・スニース (David Sneath) は、モンゴル語の他中国語も読みこなす社会人類学者・モンゴル研究者であるようであったし、論文執筆時点での Director, ヒルデガルト・ディエンバーガー (Hildegard Diemberger) は人類学的なチベット研究という限定された領域では世界的な第一人者である。こうした研究者の下で語学や地域研究的な問題領域に関するトレーニングを十分に受け、同時にケンブリッジの社会人類学の一般的な大学院教育を受けられるというのは、その地域で民族誌的研究をしていこうとする大学院生にとっては理想的とってよい環境である。言い換えれば、ケンブリッジの社会人類学の中に地域に特化した世界的な研究センターを作ろうという着想は、地域研究と理論の両面で一流の研究をなし得る人類学者を生産するための、一つの合理的な考え方なのである。ハンフリーは筆者が滞在していた時点で社会人類学科の長でもあり、もっぱら MIASU を舞台に活動していた訳ではなかったが、MIASU の設立が彼女の力によるものであったことは確かである。逆にいえば、MIASU の存在自体、社会人類学内の様々な議論に貢献できる知的体力と、外部資金を取ってきたり新たな組織の設立を大学内で認めさせたりという広い意味での政治力とを兼ね備えた彼女の存在にかなりの程度依存していると言ってよいのかも知れない。

ケンブリッジの3人の教授達は、それぞれのやり方でイギリス及びケンブリッジの社会人類学の伝統を意識し、それとの関係の中で自らの研究を進めているように筆者には見えた。だが問題は、それぞれの目指す方向が大幅に異なっていることである。

マクファーレンは彼なりのやり方で「人類学的比較」を試みる一方、社会人類学の伝統の記録と伝承に力を注いでいる<sup>37)</sup>。ストラザーンは、社会人類学における thinker であり続けながら、様々な分野の最先端の理論やアカデミアの現状への分析と接合せつつ思考を展開させることで、逆に社会人類学の範囲を超えた名声を獲得した。ハンフリーは、かなりの地理的広がりを持つとはいえ地域的に特化した研究集団を組織することで、議論の洗練と水準の高い研究者・研究業績の継続的生産を目指している。とりわけ2番目と3番目の方向性の間のずれの問題は院生レベルでも感じられているようで、「マリリンが言っていることとキャリアが言っていることは違うので、どちらの言うことを信じていいのか分からない」といった愚痴を院生が話しているのを何度か聞いたことがある。

この二つの方向性の間のずれは、ケンブリッジに固有の問題ではなく、フィールドワークと民族誌作成という伝統的な形で人類学を行おうとする人間が、個人レベル、組織レベルの双方において屢々直面する問題である。各地域における民族誌的研究の蓄積に伴い、その地域を研究する民族誌家固有の問題系が形成・展開され、議論は洗練されていく。そうした進行中の議論に対して自らの調査に基づいた貢献をすることに、少なくとも筆者は知的な喜びを感じる。だがこうした議論の洗練は屢々、地域を異にする研究者になぜそれを論じなければならないのか理解困難な領域を同時に作ってしまう。地域限定の議論に貢献しつつ、その貢献の意義をより広いディシプリン全体の中で説明するためには、別個の知的努力が必要とされるのである。組織の水準で言えば、地域に特化した研究センターでありつつ世界の人類学の中心の一つであることは、見かけ以上に困難なのではないかと筆者は考える。

他方、人類学者としての自らの知性を頼りに、様々な学問領域の成果を貪欲に吸収し、時に共同研究をも行いつつ常に自らの思考を洗練させていく作業は、魅力的ではあるが、真に第一級の知性にのみ達成可能なものであるように思われる。言うまでもなく筆者にはそんな力はないし、第一凡庸な人類学者が大挙してマリリン・ストラザーンのスタイルで論文を書くようになったとしたら、それを読まされる側としては悪夢以外の何物でもないだろう。ストラザーンはイギリス社会人類学における数少ないカリスマの一人であり、彼女の存在のためにケンブリッジにやってくる優秀な院生がいることも確かである。だが、そうしたカリスマの再生産を制度的に保証することは不可能である。

以上のことを念頭に置いてケンブリッジの社会人類学科のサイトを見てみると、なかなか興味深い記述が展開されていることに気づく。例えば *Anthropology at Cambridge*

と題されたページの後半、現状について記した部分では、まずマリリン・ストラザンがジェンダー・スタディーズと生命倫理への批判的アプローチのリーダーとして紹介され、次に学科がとりわけロシアやモンゴル、チベット、中国との関係を持っていることが強調されて、ここに MIASU の名が登場する。次に映像人類学関係の伝統を持っていることが書かれ、最後に人文、社会科学、自然科学にわたるディシプリンと活動的でオープンエンドな関係を維持していることが記されている。一見当たり障りのない以上のような記述は、実質上 3 人の教授の研究活動を並列させて体裁を整えたものであり、さらに言えば、先端的かつ学際的な研究の推進と地域的な研究センター化の双方の方向性を平等に強調することで、現在のケンブリッジ社会人類学の微妙な状況を図らずも示しているとも読める。とりわけストラザンの個人名と MIASU が並置されているところに、ストラザンとハンフリーの方針の違いが密かに現れていると見るのは、深読みに過ぎるだろうか。

#### 4. ケンブリッジ社会人類学における院生教育

前節では、ケンブリッジの社会人類学の屋台骨を支える 3 人の教授達の目指す研究の方向性についてごく簡単に瞥見した。本節では、そうした教授達やその他のスタッフが、大学院生達をいかに教育し、次世代の研究者を育てようとしているかについて、筆者の知り得た範囲でごく簡単にまとめてみたい<sup>38)</sup>。

まずは制度的な概要を見ることから始めたい。ケンブリッジの社会人類学科における大学院の教育システムは、2001-2002 年度に大きく変更された<sup>39)</sup>。そこには、MPhil SAA (Social Anthropological Analysis) と、MPhil SAR (Social Anthropological Research) という、二種類の修士課程が存在する。いずれも 1 年のコースであるが、前者は学部で社会人類学を (十分には) 学んでいない人を主たる対象としたもので、非常に体系立った形で授業 (学部と共通のものが多い) が組まれ、その各々と結びついたセミナー (こちらは大学院生のみのも) が用意されている。院生は、これらを通じて 1 年間で社会人類学の全分野についての知識を一通り与えられる。そして 1 年の終わりに 3 つのペーパーを提出するのだが、その成績が良く、かつ本人が望めば博士課程に進む事が出来る。対して SAR の方は、原則として既に学部段階で社会人類学を十分に学んでいる院生の為の、博士課程進学を前提としたコースである。SAR の院生は、修士論文を書くと同時に、来るべきフィールドワークの為の幾つかのセミナーに出席して申請書・計画書の書き方から各種調査方法に至るまでの知識を獲得

し、博士の1年目にはフィールドワークに出かけていく。SAAの院生が博士課程に入る場合、博士課程の1年目でSARの人と部分的に重なることを行い、つまり調査に関するセミナー等に出席し、奨学金や調査許可を申請し、1年目の授業期間終了後に調査に赴く事になる。さらに、他大学で修士等の学位を取って博士課程からケンブリッジの社会人類学科に入ることも出来る。このような訳で、少なくとも筆者が滞在した2002-2003年には、MPhil SAAの為のカリキュラムと、MPhil SAR及びフィールドワーク前のPhDの為の共通カリキュラムとが、全くの別物として印刷されていた<sup>40)</sup>。

以上から明白に見て取れるのは、ケンブリッジの社会人類学の大学院教育が持つ極端な体系性である。全体として、このシステムの下で教育を施せば自動的に優秀な社会人類学者が量産できるかのような外見が整えられている。とりわけSAAにおいては、全ての講義・セミナーが一つのマトリックスの中に位置付けられ、統一されたフォーマットのよく整備された最新のリーディング・リストがそれぞれの講義・セミナーごとに配布される。1年間で統一的な社会人類学を叩き込んで修士号を出してしまおうという姿勢が極めて顕著である。加えて、SARではフィールドワークの為の教育も（プロポーザルの書き方まで含めて）統一的なプログラムの中に組みこまれている。フィールドワークから帰ってくれば、先述した3人の教授が持ち回りで行う博士論文を書くためのWriting-Up Seminarが待っている。SAAとSARの分割自体、全ての院生に可能な限り早く博士号を与えるために整えられた制度であるようにすら見える。ほとんど研究者予備軍の大量促成栽培装置とも見えるこうした制度が整えられた背景には、ストラザーン（Strathern (ed.) 2000）言うところのオーディット・カルチャーの浸透がある訳なのだが、逆にいうとストラザーンは、院生の奨学金・助成金<sup>41)</sup> やら外部評価やらの問題で奔走しつつ、そうした経験とその背景について思索を重ねる事でオーディットに関する一連の業績を書き上げたのである。

次に、講義・セミナーの内容についてももう少し詳しく見てみよう。SAAのカリキュラムは大きく三分されており、第一に、Production and Reproductionという知的な名前の付いたThe Scope of Social Anthropology 1という枠がある。その内部はさらに二分されているが、その実体はそれぞれ親族理論と経済人類学である。親族理論の方は、マリリン・ストラザーン教授自ら月曜朝9時から学部生と共通の講義を担当していたが、これは少なくとも筆者にとって、ケンブリッジの学部大学院共通の講義の中でずば抜けて面白いが極端に難解な講義であった<sup>42)</sup>。より正確かつ正直に言うと、筆者は、時に早口で、時にその場で思考しつつ語られる彼女の講義の全てを理解した訳で

はないが、理解した部分からは非常に多くを学び知的刺激を受けた、ということである。実際この講義では、学部生の参加者は回を追う毎に減少し、出てくる学生も後ろの方にばらばらと座っているのに対し、かなり大きい教室の前列目から五列目あたりに意欲的な大学院生が並び、物凄い勢いでノートを取るという、他の講義とは全く異なる情景が見られた<sup>43)</sup>。他方、経済人類学の方は講義に出なかったため、つけ加え得ることはない。

一方 The Scope of Social Anthropology 2 の方は、Systems of Power and Knowledge という、これまた申し分のない魅力的な名前が付いているのだが、実態は宗教・儀礼研究と政治人類学の二本立てとなっている。宗教・儀礼研究の方はスティーヴン・ヒュー・ジョーンズ (Stephen Hugh-Jones) による明晰で判りやすい講義だったが、その密度は濃く、第一回の講義 (しかもケンブリッジの講義時間は原則として 90 分ではなく 1 時間である) からしてデュルクームからはじまってジョン・ミドルトン (John Middleton)、シェリー・オートナー (Sherry Ortner)、モーリス・ブロック (Maurice Bloch) まで片づけてしまったのには少なからず驚いた。もう一方の政治人類学の方は、アメリカで博士号を取り、現在は再びアメリカに移ってしまったマリアン・フェルメ (Mariane Ferme) が教えていたが、この授業の中心人物は明らかにミシェル・フーコー (Michel Foucault) であり、マックス・グラックマン (Max Gluckman) はほとんど登場しなかった。

3 番目の枠は Social Anthropology and the Professional Process という不思議な名前がついており、開発人類学系と博物館系の選択制となっていた。

一方、MPhil SAR と博士課程 1 年目のための授業の大半はフィールドワークの準備の為のもので、筆者はそれらに参加していない。唯一通年で参加したのは、この学年の院生達が社会人類学の理論的な議論を継続する為の場として最近新たに設けられたという Anthropology and Social Theory という 90 分のセミナーであった。このセミナーは 3 人のスタッフが交代で担当したのだが、最も多くの授業を担当したニコライ・ソリン=チャイコフ (Nicolai Ssorin-Chaikov、彼もアメリカで文化人類学の博士学位を取った研究者である) は、国家、言語、歴史、ジェンダーといったテーマを毎回設定し、それに対応した (大半はアメリカ文化人類学系の文献からなる) リストから皆さん好きなものを適当に読んできて議論をしましょうということでセミナーを始めた。しかしそれがなかなかうまく機能しないので改めて参加者と協議した結果、最終的には二つか三つの論文 (或いは本の章) について全員が読んでいることを前提に議論するという形式に変わった。ストラザンが担当した数回のセミナーもこの後者の形式

で行われたのだが、その内容については前節で簡単に触れた通りである。もう一人の担当教員ポール・コナートン (Paul Connerton) のやり方は全く対照的で、記憶と身体と近代に関する自らの原稿を授業の前半で読み上げ、後半で院生とそれについての議論を行うという、今や古風といってよいスタイルの授業であった。

他方、フィールドワークを終え博士論文を執筆中の学生が参加する Writing-Up Seminar にも、筆者は基本的に出席していない。ここでは、一学期を単位として3人の Professor が持ち回りで担当していた事、それぞれが執筆中の博士論文の章が議論の対象とされるが、それが前もってコピーされ参加者に配られていたこと、を指摘するに止める<sup>44)</sup>。

こうした授業やセミナーに参加しつつ筆者が感じた最大の疑問は、イギリス社会人類学は一体どこにあるのかということだった。例えば、各授業の最初に必ず渡される統一的なフォーマットを持つ体系的なリーディングリストには<sup>45)</sup>、社会科学の古典、イギリスの社会人類学の古典とされているものに加え、近年の理論的・民族誌的業績が、筆者の予想を超えて多く含まれていた。しかも、時代が下れば下るほど、アメリカ文化人類学系統の文献が増加し、イギリス社会人類学の文献が減っていく傾向が見られ、イギリス社会人類学の伝統に連なる人が書いた論文があっても、ケンブリッジの同僚の書いたものであったり、内容的に容易にアメリカ系の学者の論文に置換可能なものであることが多くなっていくように思われた。この傾向は、とりわけアメリカで博士号を取った比較的若いスタッフに顕著であるが、必ずしも彼らだけに限られるものではない<sup>46)</sup>。印象論的に言えば、そこにあるのは、自分が少し前に日本で読まれた本のリストを緻密に体系化し、様々な程度にイギリス風の香を付けた大幅増補アップデート版といった趣のものだったのである<sup>47)</sup>。

こうした現象が生じる背景の一つとして指摘出来るのが、スタッフの国際化である。既に触れたように、ケンブリッジの社会人類学の講師陣のある部分は、アメリカで学位を取った文化人類学者によって占められている。また、社会人類学科のみならずケンブリッジのカレッジにも所属していた研究者がアメリカに移った例は、最近でも幾つかある。少なくとも一部の人類学者にとって、ケンブリッジ大学はイギリス社会人類学の中心というよりは、アングロフォーン世界に広がる人類学の、給与面からすれば決して恵まれているとは言えない就職口の一つでしかないと言った方が、実体に近いのかもしれない。筆者はカレッジ内での雑談の中で、ケンブリッジの研究者人口は Professor として迎えられる大先生と、よりよき就職口を探しつつ一時的に滞在する若手研究者に分裂しており、その間を埋める層が希薄なのが大きな問題だ、とい

う話を何度も聞かされたが、社会人類学科も同様の問題にさらされる危険を常に孕んでいるのである。

他方学生の出身も多様であり、しかも一時的な要因でその割合がかなり大きく変動することがあるようだ。全体的な印象としては、EUという枠組が非常に大きく、コモンスウェルスという枠組はそれほど目立ってはいないように見えた。アングロフォンという枠組も明らかに存在していた。MIASUの存在もあってモンゴルからの留学生もいた。加えて、学科やカレッジで聞いた話を総合すると、「ブッシュが大統領のアメリカで教育を受けたくない」というアメリカ人、9.11後でアメリカのヴィサが厳しくなってイギリスに留学先を変更したという中国人がかなりいたようである。

加えて、カリキュラムが極端に体系化され整備されたことによって、逆に社会人類学的な過去との対話が減っている可能性が指摘できる。リーディングリストが拡充アップデートされれば、それだけ社会人類学に限らず、従来からの古典的著作の占める割合が減るのは道理である。筆者のケンブリッジでの親しい友人の中には、イギリス国外から様々な遍歴を経てケンブリッジの社会人類学に流れ着いた筆者とほぼ同年配の知的体力ある院生が何人かいたのだが、その一人が言うには、「ケンブリッジでの古典はフーコーとデリダ (Jacques Derrida)。院生のうち学部で人類学をやっていない人の中には、その後の最近の議論しか読んでいない奴が多い。古い物は読んでないからゼミでも言及しない。デュルケム、ウェーバーなんてほとんど誰もちゃんと読んでいない」のであった。また別の院生は、「ケンブリッジでの話は一見格好良さそうな話だけれど、ハイデッガー (Martin Heidegger) を引用もせず読みもせず、その上澄みだけを使って、まことにけしからん」と飲むたびに息巻いていた。そうした教育の下で生み出される論文が、プリリアントではあっても、知的な対話のタイムスパンが短いために、どこが社会人類学なのか判然とせず (勿論それは論文の著者にとってはどうでもよいことなのかも知れないし、社会人類学という枠組が現在必要なのかどうか自体問われるべき問題である訳だが)、しかも論文自体の賞味期限がすぐに切れてしまう類のものになりがちなのではないかという危惧もまた、容易に抱きうるものである<sup>48)</sup>。

以上を念頭において先ほど参照したケンブリッジの社会人類学科のサイトに戻ると、「この学科はそれぞれ自らの分野の先端にいる a cosmopolitan body of teaching staff を持っています」という宣伝文句が嫌でも目に付くことになる<sup>49)</sup>。だがこのコスモポリタン性が、「社会」人類学の維持発展にプラスの機能を果たしているかは大いに疑問である。実際それは、マリノフスキー、ファース、フォーテス、グラックマン、タ

ンバイア、ゲルナーといった人々を中核メンバーとして受け入れたイギリス社会人類学がその存立基盤としてきたところのコスモポリタン性であるよりは、エヴァンズ=プリチャードやフォーテスやグラックマンがイギリス社会人類学を守るために何とかして排除しようとした、限りなくアメリカ化に近いコスモポリタン性であるのかも知れないのである<sup>50)</sup>。

ここまでの議論は、独自の知的運動としてのイギリス社会人類学は1970年代初頭に終焉を迎えたというアダム・クーパー (Adam Kuper) の議論 (Kuper 1996: 176) からすれば、その当然の帰結だと言えるかも知れない<sup>51)</sup>。だが、全てのイギリス系社会人類学者がクーパーに賛成している訳ではない。例えばジョナサン・スペンサー (Jonathan Spencer) は、学説上の混交状態にも拘わらずイギリス人類学を独自の存在たらしめ続けた制度の存在を指摘している (Spencer 2000: 17-20)。故アルフレッド・ジェルが、目前の死を見据えつつ自らの研究者としての歩みを回顧した文章の中で称賛して止まらなかった、イギリス的なセミナー、とりわけ学科レベルのセミナーの伝統である (Gell 1999: 1-8)。

ケンブリッジの社会人類学の全てのカリキュラムの中で、金曜午後5時からの Senior Seminar (別称 Friday Seminar) は、確かに特別の存在であった。この時間になると、学科のスタッフや大学院生はもとより、場合によっては他大学からの人類学者や既にリタイアした大先生が、社会人類学科の講義室に、時にほとんど鈴なりで詰めかける。司会による紹介の後、毎週一人の社会人類学者 (学科の人間であることもあるが、そうでない事の方が多い) が自らの論文を約1時間で読み上げ、次の1時間が質疑応答、議論に費やされる。通常レジュメ等は何もなく、参加者は発表内容を音で聞いて全てを把握し、しかるべき質問を組み上げなければならない。これは相当の知的労力を伴う作業である。ところがまわりを見渡すと、必死でメモを取っているのは筆者や場慣れしていない一部の院生だけであって、教授陣をはじめ多くの参加者は、時折メモを取る程度で、大抵椅子に腰かけてただ話を聞き、それが終わるとやおら手を挙げて鋭い質問を繰り出すのである。議論は屢々白熱するが、セミナー開始後2時間で司会者が閉会を告げ、参加者の多くは、よりうち解けた雰囲気であつた先刻までの議論を振り返りつつ、キングズ・カレッジのバーに移動する。これは、ジェルが誇りと愛着を込めて描いたものとほとんど同一の光景である<sup>52)</sup>。

確かにここには、マリノフスキーのセミナー以来のイギリス社会人類学の伝統が脈々と生きている<sup>53)</sup>。実際筆者は、Senior Seminarの要求する知的集中と、成功したセミナーが生み出す交通の密度とに何度も圧倒され、こうした場が存在することに強

い羨望の念を抱いた。だが、そこに幾つかの変化の兆しが見えたことも確かである。あからさまな事実としては、この程度の内容を話すのは如何なものかと傍目にも思える力のない発表が続いた後に、何人かのフィールドワーク前の院生がセミナーの質の改善を求めて当時学科長だったハンフリーにクレームを付け、彼女も制度の改善を考えたいと答えた、という場面を目撃したことがある<sup>54)</sup>。これは二つの面で大きな変化ではないかと思う。セミナーの質の問題に加えて、セミナーの権威自体が揺らいでいることになるからだ。ある著名な社会人類学者が、彼が教育を受けた1960年代の社会人類学におけるセミナーの重要性について触れる中で、こうしたセミナーにおいては発表者の発表自体よりも、それを元手に偉大なる社会人類学者が何を論じ合うかが重要だった、と語るのを聞いた事がある。対して21世紀初頭のケンブリッジでは、偉大な社会人類学者達の知的なやり取りだけでは、既に場が持たなくなっているようであった。かつてフォーテスはアメリカでの国際研究会で、理論的な発言を繰り返す若者に対し「君はまだ手をよごしたことがないのだろう」と言ったそうだが（中根1987: 35）、この手の発言は最早通用しそうなない雰囲気であった<sup>55)</sup>。

いずれにせよ、こうしたセミナーを継続的に成り立たせる為には、少なくとも通常の雑誌論文に見られる程度の複雑な論理展開を耳で聞きながらその場で頭の中に再構成する能力を持つ人間がそれなりの人数揃っている必要がある。そして、こうした能力を身につける為には、それなりの知的訓練が必要である筈だ。ところが、大学院の授業が体系化され、誰もが判りやすい形で屢々プリントやプロジェクタを用いて行われるようになるにつれ、そうした訓練をする機会はますます減少しているように思われる。私が出た少なからぬ講義やセミナー（Senior Seminarを除く）の中で、純然たる原稿読み上げ方式の「伝統的」な授業を行った教師は、ポール・コナートンただ一人であった。学生に発表させる場合でも、ごく短時間で論文や本の要点をまとめさせるばかりで、まとまった内容を読み、その場で聞き、しかる後議論するという形のものではなかった。Writing-Up Seminarですら、事前に発表内容のコピーが参加者に配られていたのである<sup>56)</sup>。

僅か一年の滞在から確定的な事を言う事は慎まなければならないが、こうした変化はSenior Seminar自体にも生じつつあるように思われた。私の滞在期間中、最も盛り上がったSenior Seminarは、恐らくダニエル・ミラー（Daniel Miller）によるものであった（最も議論が白熱したのは、多分アダム・クーパーの回であったが）。だがその盛り上がりの原因は、彼の発表内容よりは、そのプレゼンテーションのスタイルにあったように見えた。彼はインドの女性の衣装に関する若干の理論的・民族誌的導入の

後、いきなり裏声で「私の名前はミナ」と語り出し、初めてサリーを着た時のことを回想するインド女性を延々と演じたのである<sup>57)</sup>。確かにここでもミラーは書かれた原稿を読んだのであって、その点で Senior Seminar の伝統を踏襲しているとは言える。だが筆者は、こうしたあからさまな演技に多くの聴衆が引きつけられる時、イギリス社会人類学の知的伝統は内部から徐々に侵食されているのではないかという疑念をも、禁じ得ないのである。

## 5. おわりに

ケンブリッジの社会人類学科は筆者が滞在を終えた後も変わり続けている。注12で触れたように、キャロライン・ハンフリーが新たな教授ポストに就任する。何人かの比較的若いスタッフの入れ替わりがあり、ステイーヴン・ヒュー=ジョーンズは引退し、多くの学生に慕われていたスー・ベンソン (Sue Benson) が亡くなった。ケンブリッジ社会人類学の屋台骨を支えている3人の教授はいずれも60歳を優に越えており、近い将来、少なくとも二つの教授ポストに新たな人物が就任することになる筈だ。だが、イギリス社会人類学における次代のスター不足もあって、今後の状況は全く不透明である。

現在までの所、カリキュラムの体系化とスタッフや学生の国際化を推し進めてきたケンブリッジの社会人類学科は、イギリス国内において高い評価を維持している。実際学科は、2005年度のTimes誌のTimes Good University Guideにおいて、イギリスの人類学科中第一位とされた<sup>58)</sup>。だが、一見教育の合理化透明化と見えるこうした動きは、同時に研究者候補の促成栽培化でもある。長期のフィールドワークによって民族誌を書くという学科公認の建前と博士課程の実態とは、徐々に分裂の度を高めつつある。加えて整備された教育プログラムは、恐らくは意図しない形で、従来の知的伝統との乖離をもたらす要因ともなっている。そうした乖離は、授業内容やリーディングリストのみならず、Senior Seminar というイギリス的な社会人類学者の再生産における核心部分にすら及びつつあるように見える。

他方、より学問の内容に関わる部分で、ケンブリッジの社会人類学科の独自性を如何なる形で主張していくかについての確固たる方針を、学科全体が共有している訳でもなさそうである。「社会」という概念にこだわりつつ多方面に戦線を拡大していくストラザーンの戦略は、確かに世界中の優秀な院生を魅了するかもしれないが、それを学科全体の売りとするのは、彼女の代替不可能な知性と体力に依存することをも

意味する。そうするとケンブリッジの社会人類学科の将来は、彼女と同程度に个性的かつカリスマ的な「社会」人類学者をケンブリッジに連れて来られるかという一点にかかり、もし幸いにもそうした人材が得られた場合、学科のイメージは次代の看板教授の個性に連動して大きく変わることになるだろう。他方ハンフリーが試みているように、一つの地域研究センターとしての独自性を追求していくことは可能だろうが、そこから他地域の研究者が目を見張る程の業績が続々と刊行されない限り、かつてケンブリッジの社会人類学科が持っていた求心力は大幅に低下することになるだろう。そしてそもそも、こうした教授達の方針がどの程度学問的な要請に基づくものでありどの程度オーディットや外部資金問題に対応していった結果なのか自体、かなり難しい問題である<sup>59)</sup>。いずれにせよ一つの大きな問題は、オーディットの展開と国際化の中で、ケンブリッジ、より広くはイギリスの社会人類学を如何なる枠組の下に位置付けるかという点にある筈だ。

イギリスの社会人類学はアメリカの文化人類学とは違う。この命題は、両者を厳密な境界を持たないプロトタイプとして捉えた場合、21世紀初頭においても正しい<sup>60)</sup>。もしこの差異を実体的に維持し続けることが出来れば、ケンブリッジの社会人類学科の求心力は、イギリス国内の力学によって当面維持されることになるだろう。だがケンブリッジの状況を見る限り、両者がいかに違うかを説明する事は以前よりずっと難しくなっているようだ。船曳建夫は、イギリスとアメリカの人類学の基本的枠組の形成と展開を文化対社会の対比として略述した論考の最後で、そうした「相違は未だ明らかに存在している」と述べているが(1988: 44)、現在の筆者にはここまで言い切る自信はない。両者の差異は解釈的実践によって相互的に行われる境界維持の問題だという議論(Watson 1984)にも、相当の現実味があるように思う。だが、差異がその程度のものだとしたら、ケンブリッジを単純にイギリス社会人類学の中心地として位置付けて事足りりとする事は困難になる。

一つの可能性は、European Association of Social anthropologist (EASA) が少なくとも名目上行っているように、社会人類学という名称をヨーロッパのものとして再規定することである。実際例えばアダム・クーパーは、EASAのまさしく最初の論文集の序文において、「ヨーロッパの社会人類学」の伝統に影響を与えている学問分野として、「ヨーロッパの社会学、歴史学、哲学」及び「認知科学」と並んで、「アメリカの文化人類学」を平然と挙げている(Kuper (ed.) 1992: ix)。この「ヨーロッパ」という枠組の背後に、EUという制度が存在していることは言うまでもない。その影響は、例えばケンブリッジの社会人類学科におけるヨーロッパからの院生数にも如実に表れ

ている。だが、本当に「社会人類学」と「ヨーロッパ」という枠組が、クーパーが言うほど簡単に結びつくのかは明らかではない。そもそも、「ヨーロッパ」の「社会人類学者」達は、その多言語的な状況の中で、いつから「社会人類学者」として共通の土俵で議論を重ねてきたのだろうか。ケンブリッジで筆者滞在当時教鞭を執っていた教師の何人かはヨーロッパ大陸出身だったが、彼女達の議論の中に、イギリスの伝統を下位区分として含む所の「ヨーロッパの社会人類学」の反映を読み取る事は筆者には出来なかった。

全く別の可能性として、イギリスや社会人類学という枠組に固執せず、ケンブリッジを世界の人類学の中の幾つかある中核拠点の一つとして再規定するという方向性がある。確かに、現在イギリスの社会人類学者の全てが、「社会人類学」という枠組に固執している訳ではない。例えば共にイギリスで学位を取ったヘンリエッタ・ムーア (Henrietta Moore) とトッド・サンダース (Todd Sanders) の編集した最近のリーダー *Anthropology in Theory* (2006) には、フランツ・ボアズ (Franz Boaz) とその弟子達のもとより、驚いた事にレスリー・ホワイト (Leslie White), ジュリアン・スチュワード (Julian Steward) までが登場する。これは、例えばその10年前に刊行されたインゴールドの編著 *Key Debates in Anthropology* (1996) が、その名称に反してイギリス社会人類学を代表する研究者達が集まって行った議論の成果をまとめたものであるとは全く対照的である<sup>61)</sup>。だが、こうした路線の全面的な採用は、実質上、アングロフォン世界の優位性を前提とした自由競争世界の中に身を置くことを意味する。個々の研究者はよりよい研究環境を求めて世界中を移動し、そうした人々のかなりの部分にとって、ケンブリッジは、その伝統と心地よい知的環境と優秀な大学院生の存在にも関わらず、待遇面ではさして魅力のない場所だと映ることだろう。イギリス社会人類学はその従来持っていた特徴をますます失っていき、ついには、かつて偉大なる先祖達が怖れた通り、圧倒的な人数を誇るアメリカ文化人類学の中に、実質上吸収されてしまうことになるかも知れない<sup>62)</sup>。尤もこれは、アメリカ文化人類学なるものが、その時までそれとして無事存続していると言い得る状況にあればの話であるが。

メアリー・ダグラスは、1993年のASAのDecennial Conferenceに、忘却についての半ば懐古的な論考 (Douglas 1995) を寄せている<sup>63)</sup>。自らの聖書研究と、エヴァンズ=プリチャードのあやとりやW. H. R. リヴァースの忘れ去られた忘却論の間を行きつ戻りつしながら、最終的には時流と忘却に抗して1950年代の社会人類学を擁護するこの論考は、二つの点で筆者をまごつかせるものであった。第一に、1950年代のイギリス社会人類学のヒエラルキカルな構造が60年代のリーチ、ギアツ、サーリン

ズ、レヴィ=ストロース（Claude Lévi-Strauss）といったビッグマン達の登場によって変化し、その後分裂抗争の時代に至るといふ彼女が描く図式は、筆者が東京で習った人類学から得たものと奇妙なまでに一致している。第二に、レナート・ロザルド（Renato Rosaldo）のアルバックス（Maurice Halbwachs）に対する、またジェイムズ・クリフォード（James Clifford）の1950年代イギリス社会人類学の議論の内実に対する忘却を非難する時、彼女は、それが彼らにとっても単なる無知でなく忘却であることを当然の前提にしている。社会人類学という枠組をより広い人類学になし崩し的に接合し、自らは後者の土俵で活躍しつつ前者の歴史を世界の人類学の共通遺産の一部として記憶させようとするこうしたやり口が多くの社会人類学者に、またそれを越えて共有されているとしたら、イギリス社会人類学がそれとして世界に向けて誇るべきは、まずもって自らの過去の伝統だということになるだろう。そうなると、ケンブリッジにおいて社会人類学の伝統を第一に背負っているのは、実はストラザーンでもハンフリーでもなく、ウェブ上で世界に開かれた祖先祭祀を続ける歴史家兼人類学者、アラン・マクファーレン教授だということになるろう。この祭壇にはギアツ以下イギリス社会人類学以外の伝統に属する人々も祀られているが、これはダグラスの図式を逆に保証するものである<sup>64</sup>。そしてケンブリッジの社会人類学にとって幸いな事に、マリリン・ストラザーン教授は既に祖先の一人としてこの祭壇に祀られている。

勿論「イギリス社会人類学」という枠組を外して現象を見れば、そこに展開されているのは、第一級の教員達、野心的な若手研究者、極めて優秀な大学院生達が<sup>65</sup>、小さな学問町の中で互いに議論を戦わせつつ様々に研究を進めているという、羨むべき光景である。誰が「イギリス社会人類学」を欲しているのかは、それ自体考えられなければならない問題なのだ。だが、その羨むべき光景を維持するために、ケンブリッジの社会人類学科の構成員達は様々な水準でますます多くの努力をすることを強いられており、それが学問の内容や方向性自体をもある程度規定しているようにすら見える。これは、日本で人類学を行っている者が、イギリスの同僚達とは違う形で、日々直面している問題である。

## 注

- 1) 本稿は、日本文化人類学会近畿地区研究懇談会「人類学はなにをめざすのか」（於・国立民族学博物館）での発表「イギリスの動向—2002-3年のケンブリッジを例に」を大幅に改訂したものである。また、その一部は第49回東文研セミナー「民俗学、人類学の現在」（於・東京大学東洋文化研究所）での発表「ケンブリッジで思ったこと、考えたこと」に基づいている。これらの機会にご批判、コメントを頂戴した先生方に感謝申し上げます。また、芦刈美紀子氏（ケンブリッジ大学社会人類学科 Research Associate）、及び田中英資氏（ケンブリッ

- ジ大学社会人類学科博士課程)には、提出直前に草稿に対する貴重なコメントを頂いた。三人の匿名のレフェリーの先生方にも細部にわたる御指摘を頂いた。残念ながらそれらの全てを本稿に生かすことは出来なかったが、記して感謝申し上げる。
- 2) 1992年から1995年までのネパール滞在中、筆者はネパールの人類学や周辺諸学の先生方から、調査上、民族誌学上の事はもとより、理論的な問題についても多くを学んだ。実際、私の指導を担当された Dilli Ram Dahal 教授は、SOAS の Lionel Caplan を相手にネパールの非カースト集団を記述する語彙を巡る論争を挑んでいたのである (Dahal 1979; 1996, Caplan 1970; 1990)。だが、筆者は大学院ではなく Tribhuvan 大学内にある Centre for Nepal and Asian Studies という研究所に所属したため、ネパールで人類学を体系的に学ぶ機会はなかった。
  - 3) 前者はイギリス社会人類学の幾つかの主要な民族誌に焦点を合わせ、後者はイギリス社会人類学の幾つかの制度的側面における変容と持続に重点を置いたものである。
  - 4) 個々の人類学者の出身と社会階層の分析に基づいてイギリス社会人類学史の俗説を糺すいかにも彼らしい論文の中で Edmund Leach が言うように、イギリス社会人類学史が、参与した観察者と参与しない観察者によって異なって見えるだけでなく、参与者の中でも「内部者」と「外部者」によって異なって見えるものだ (1984: 7) としたら、なおさらである。
  - 5) ここは本格的なイギリス社会人類学史を展開する場ではないし、筆者にそれを行う力はない。Goody (1995), Kuklick (1991), Kuper (1996), Stocking (1995), Stocking (ed.) (1984) 等の基本文献を参照されたい。
  - 6) 例えば Leach が Max Gluckman に初めて会ったのは 1938-39 年のオックスフォードにおける Radcliffe-Brown のセミナーにおいてだという (Leach 1984: 20)。彼がその場の状況全てと、とりわけ Gluckman に対して、その後も継続することになる嫌悪を即座に覚えたとしても、彼がそうしたセミナーに向向いたという事実自体は残る。ケンブリッジにおけるセミナーの現状については後に触れる。
  - 7) Murdock によるイギリス社会人類学に対する批判と Firth による応答は、American Anthropologist 誌に続けて掲載されている (Murdock 1951; Firth 1951)。
  - 8) Gregory Bateson や Malinowski の先例があることは承知しているが、イギリス社会人類学自体の制度化の度合いとの関係で意味合いが異なるだろう (cf. Kuper 1996: 180)。
  - 9) 最近のイギリスにおける人類学を志望する学生数の減少、一般の人々への名前の浸透度の低さ等については Sillitoe (2003)、社会人類学を学ぶ各レベルの学生に関する統計とその分析は Mills (2003a)、教員の苦境と努力については, Berglund (2006)、及び Dracklé and Edgar (eds.) (2004) に収録されたイギリス関係の諸論文を参照。
  - 10) ただし Tambiah が博士学位を取ったのはアメリカである。
  - 11) <http://www.archanth.cam.ac.uk/> を参照。なお、本稿で引用された全てのウェブページは、2006年3月21-31日の間に最終チェックされた。
  - 12) 社会人類学科のサイトの情報 (<http://www.socanth.cam.ac.uk/newsSeminarsAndEvents.html>) によれば、2006年より恒常的なポストとして Sigrid Rausing Professorship of Collaborative Anthropology なるものが新設され、初代の Professor には Caroline Humphrey が就任する予定とのことである。この件については次のページも参照 (このページについては田中英資氏にご教示頂いた)。<http://www.admin.cam.ac.uk/reporter/current/weekly/6016/12.html>
  - 13) とりわけ Hutton は、そのカースト論 (1946) 等でそれなりに有名である。
  - 14) 今回この文章を書くために文献に改めて目を通して最も驚いたことの一つは、Meyer Fortes の教授就任をめぐる紆余曲折、とりわけその主要な対抗馬が Christoph von Fürer-Haimendorf (南アジアの「トライブ」研究に膨大な業績を上げた、オーストリアの正真正銘の大貴族の末裔) だったということである (Stocking 1995: 430-31; Spencer 2000: 3)。このことは、これが Hutton の後任人事であることを考えれば判る話ではあるのだが、それなりに Fürer-Haimendorf の業績を読んできた者としては、現在のイギリス社会人類学主流とされているものの同時代における脆弱さと、教科書的な「イギリス社会人類学史」から排除されているもの大きさとの目を当たりにして、しばし嘆息してしまった。
  - 15) ケンブリッジ大学のポストの変遷については、次のサイトの情報に依拠した。<http://www.cus.cam.ac.uk/~jld1/lists/>
  - 16) この伝統が単純に展開されていった訳ではない経緯については、Kuper (1988:178-189) 及び Leach (1984: 4-5) を参照。
  - 17) 彼に依れば、社会人類学はカルトとリニージの中間形態、即ち Malinowski と Radcliffe-Brown を始祖に頂く二重出自集団をなしており、この二重出自集団は、当初 Leach を Fortes

- に対して、後には Leach の支持者を Goody の支持者に対して据えた所の半族システムによって地域的に再生産されていたという (Hart 2003: 1-2)。
- 18) <http://www.socanth.cam.ac.uk/aboutTheDepartment.html>。ケンブリッジの人類学者再生産機能の卓越については Spencer (2000: 10) も参照。
  - 19) <http://www.socanth.cam.ac.uk/anthropologyAtCambridge.html>
  - 20) といっても当時そのような名前のポスト自体存在しなかった。Haddon は Ethnology のポストには就いている。なお、Ethnology の Reader のポストは、Haddon の後任 Hodson の William Wyse Professor への就任に伴い、1932 年に廃止されている。
  - 21) この人物については、Urry (1985) も参照。
  - 22) 日本語で読めるものではマクファーレン (2001)。他にガラス、茶、福沢諭吉等様々な対象について、「近代の謎」の様々なねじれを指摘する著作を続々と刊行している。彼の膨大な著作については、彼自身のサイト内の以下のページを参照。<http://www.alanmacfarlane.com/FILES/explorations.html>
  - 23) 彼自身は自らの近年の業績を、多くの研究者がそこから手を引いてしまったところの社会人類学的比較の、ある種の継承だと考えているようである。
  - 24) この部分の記載は当時の筆者の日記にのみ依っているので、個々の物品と固有名の対応関係は不正確かもしれない。いずれにせよ、時代が下るにつれてオーラが薄れていくように思えるのは気のせいだろうか
  - 25) <http://www.digitalhimalaya.com/>
  - 26) <http://www.alanmacfarlane.com/ancestors/index.html>。このプロジェクトに関しては、Macfarlane et al. (2005) を参照。
  - 27) サイトで公開された動画のうち、Audrey Richards, Meyer Fortes, M. N. Srinivas の白黒のものは、Goody の企画によるものと明記されている。
  - 28) 彼女の近年の業績は <http://www.socanth.cam.ac.uk/staff/publications/strathern.html> に掲載されている。なお、彼女の議論が(少なくとも筆者に)難解に見える背景には、筆者自身の知力の乏しさに加えて、彼女自身の記述スタイル等幾つかの理由があるようである (Gell 1999: 29-31)。
  - 29) 従来会計学や財政学の用語であった audit の語 (通例「監査」と日本語訳される) は、とりわけ 1980 年代以降その使用領域を拡大し、例えば accountability といった概念と結びつきつつ、高等教育機関に勤める人々を含みますます多くの人々を拘束する政治的技術となっている (Strathern (ed.) 2000)
  - 30) 故 Alfred Gell は、彼女のアカデミックなペルソナには、現代の社会批評家、メタ人類学者、ストリートな人類学者という三つの側面があると指摘している (1999: 29)。
  - 31) 正確には SAA の修士 2 年と SAR の博士 1 年のためのものである。なお、これらの略語を含むケンブリッジの社会人類学科の制度的枠組については後述する。
  - 32) ただし彼女は数えられる社会がそこにあるという実体的立場には強く反対している (Ingold (ed.) 1996: 57-98)。
  - 33) 彼女が「文化」概念に対して「社会」概念を (差異と同一性という問題系を通してかなり複雑な仕方) 擁護した論文として、例えば Strathern (1995) がある。
  - 34) 筆者が最初に彼女の名前を知ったのは、北東ネパールのチベット系の人々 Lhomi の交易を巡る一連の論考 (Humphrey 1985; 1992) によってであった。
  - 35) 彼女の研究業績については、<http://www.innerasiaresearch.org/humphreypublications.htm>、及び <http://www.socanth.cam.ac.uk/staff/publications/humphrey.html> を参照。
  - 36) MIASU の活動については、<http://www.innerasiaresearch.org/> 参照。
  - 37) ただし Macfarlane 自身はケンブリッジの出身ではなく、最初の (歴史学の) 学士、修士、博士号はオックスフォードで得ている。
  - 38) ただし、上述のように筆者は大学院生教育の全ての場を見たわけではない。記述は、フィールドワーク前の授業・セミナーに大きく偏り、教員による個別指導のやり方や、フィールドワーク後の状況についてはほとんど触れることは出来ない。
  - 39) この段落における大学院制度の詳細及び変更年度の記述については田中英資氏のご教示により記述を一部修正した。
  - 40) *Cambridge University Reporter* CXXXIII: Special No 1 (2002), pp. 235-236.
  - 41) オーディット全盛のイギリスにあつて、社会人類学の大学院生が、フィールドワーク期間の為に他の分野の院生に比べて不利な扱いを受けないよう各方面と交渉する事は社会人類学

- の存続にとって極めて重要な作業である。
- 42) 講義で話された内容の一部は、彼女の近著の中にも登場している (Strathern 2005: 20-28, 111-114 等)
- 43) 逆に Macfarlane 教授の授業は、とにかく判りやすいのでとりわけ学部生に人気があったようである。例えば Adam Smith から Ernest Gellner までの理論を通覧する一連の授業のある回では、いきなり「私が Alexis de Tocqueville です」と一人称で語り出し、次にスライドを見せて「これが私の生れた家です」と授業を進めていった。勿論授業の中核は彼の理論の批判的紹介なのだが、その日の最後の台詞は、「私は 1859 年に死にました」だったと記憶している。なお、筆者はケンブリッジ滞在中、他人になりかわって語る社会人類学者をもう一人目撃したのだが、これについては後に触れる。
- 44) 現在このセミナーに参加している田中英資氏によれば、発表者は前もってペーパー (5000-10000 words) を準備・配布し、セミナーではペーパー自体は読み上げず、最初の 20 分から 30 分を使って、フィールドワーク全般の話、博士論文の構成、およびペーパーに関する自分自身のコメントを話し、その後議論が行われる、とのことである。
- 45) Alan Macfarlane は、SAA の学生用のゼミの中で「リーディングリストは、半分は教授の自己満足のためにあるので、人生がつぶれるから全部は読まなくていい」と発言していたが、この認識を全ての教員が共有しているかは疑問である。少なくとも、リーディングリストの内容を院生がそれなりに読む事を前提にしなければ、SAA の詰め込み教育は成立し得ないように思われる。
- 46) Stephen Hugh-Jones が Geertz や Michael Taussig についてかなりの時間を取って論じていたのは、筆者にはやや意外だった。
- 47) それでは院生達自身の興味はどうか。この点について総体として知る事は出来ないが、私も顔を出していたある学年の院生達の読書会で読むべき基本的文献候補として挙げられた本の著者名一覧を挙げる事に、若干の意味はあるだろう。それらは、Alfred Gell, Marilyn Strathern, Roy Wagner, Michael Taussig, Maurice Bloch, Clifford Geertz, Arjun Appadurai, Dan Sperber, Pascal Boyer, Maurice Goderier である。なお Appadurai は近年の議論ではなく *Social Life of Things* が挙がっていた。私自身は、意外にアメリカ的ではないな、という印象を持ったことを記憶している。
- 48) 勿論古典との対話をいかにして行うのか、そもそもそれが必要であるのかは、イギリスにおいても日本においても大きな問題である。日本については、近年の「古典と現代をつなぐ」ことを謳った教科書 (山下編 2005) における苦闘を参照。
- 49) <http://www.socanth.cam.ac.uk/aboutTheDepartment.html>
- 50) サイトの同じページに載っている学科が行っている研究主題の一覧や、別のページにある最近の博士論文の主題一覧 (<http://www.socanth.cam.ac.uk/research/recentPhdTopics.html>) だけから、これがイギリス社会人類学の中心となる大学のものであることを言い当てるのはかなり困難なのではないだろうか。
- 51) Edwin Ardener が、機能主義者達の実証主義的虚妄を叩いた 1971 年のマリノフスキー記念講演 (Ardener 1971) のタイトルに、the new social anthropology でなく the new anthropology という言い方を意識的に用いたことが思い出される。他方、Keith Hart (2003) は、フィールドワークに基づいた民族誌というイギリス社会人類学のモデルの背後に、国民国家とナショナリズムという、当時隆盛を誇ったが今や時代に合わなくなったモデルが存在することを指摘している。
- 52) 勿論、全ての社会人類学者がこうしたセミナーの全てを礼讃した訳ではない。Leach の Radcliffe-Brown のセミナーに対する反応については注 6、Hart と Fortes とのやりとりについては注 55 参照。
- 53) この伝統は、実は社会人類学的なものであるよりはイギリス的なものであるようにも思えるが、それを確証するだけの知識を筆者は持っていない。
- 54) 芦刈美紀子氏によれば、現在 Senior Seminar はまずセミナー全体のトピックを決めた上で個々の発表者をアレンジしている由であるが、この変更はこうした批判への対応と理解できるものである。
- 55) 他方 Fortes は、セミナーの議論の経験主義に嫌気がさした若き Keith Hart に対して「Keith, 問題は君が合理的過ぎることなんだ。人類学は不合理なんだよ」と言ったという (Hart 2003: 2)。こう来られると対応はずっと面倒である。
- 56) MIASU のセミナーにおいても、通常プリントの配布、或いはパワーポイントを駆使した

- プレゼンテーションが行われていた。さらには Senior Seminar においても、パワーポイントを使用した発表がいくつかあった。
- 57) この時の Mina の話は既に出版されている (Banerjee and Miller 2003: 13–18)
  - 58) <http://www.socanth.cam.ac.uk/newsSeminarsAndEvents.html>, <http://extras.timesonline.co.uk/gooduniversityguide2005/20anthropology.pdf>
  - 59) この論点に関して、芦刈美紀子氏の御指摘に感謝する。
  - 60) 学会組織としても、RAI は少なくとも名目上 Britain and Ireland という地理的枠組に基づいた組織である。他方、ASA が現在その根拠としているコモンウェルスという枠組は、あまり機能していないようである。
  - 61) なお、この二冊の本を取り上げたのは、購入当時期待していた内容と実際のそれとのずれに驚いたのを未だ記憶しているからであって、この差異がどの程度時代の変化を反映し、どの程度編者の個性や編集者の要求によるものなのかを判断する材料は、筆者にはない。
  - 62) アメリカの文化人類学者について、「我々は彼らのものを頑張って読むが、彼らは我々のものを読まない」と漏らした著名なイギリスの社会人類学者（ただしケンブリッジの人ではない）を、筆者は知っている。
  - 63) Douglas が論文中で触れている 1993 年の学会における雰囲気の変化を最もよく反映した論文集として、Moore (ed.) (1996) を参照。
  - 64) ただし、この祭壇は本質的には Macfarlane 教授の個人祭祀の為のものという趣が強く、人類学者以外のヒマラヤ研究者が多数祀られている他、Macfarlane の師であり、Fortes に負けてケンブリッジの教授職に就けなかった von Fürer-Haimendorf の姿も見られる。
  - 65) 本論ではあまり触れなかったが、院生の活力が学科にもたらすプラスの影響は大きい。Cambridge Anthropology 誌は当時の大学院生達のイニシアティブで作られたし、芦刈美紀子氏によれば、近年 Cambridge University Social Anthropology Society (CUSAS) という組織が作られ、活発に活動しているという。以下のサイトを参照。<http://www.cam.ac.uk/societies/cusanth/>

## 文 献

- Ardener, Edwin  
1971 New Anthropology and Its Critics. *Man* 6 (3): 449–467.
- Banerjee, Mukulita, and Daniel Miller  
2003 *The Sari*. Oxford: Berg.
- Berglund, Eeva  
2006 Generating Nontrivial Knowledge in Awkward Situations: Anthropology in the United Kingdom. In Gustavo Lins Ribeiro and Arturo Escobar (eds.) *World Anthropologies: Disciplinary Transformations within Systems of Power*, pp. 181–199. Oxford and New York: Berg.
- Caplan, Lionel  
1970 *Land and Social Change in East Nepal: A Study of Hindu-Tribal Relations*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.  
1990 ‘Tribes’ in the Ethnography of Nepal: Some Comments on a Debate. *Contributions to Nepalese Studies* 17 (2): 129–145.
- Dahal, Dilli Ram  
1979 Tribalism as an Incongruous Concept in Modern Nepal. In M. Gaborieau and A. Thorner (eds.) *Asie du Sud: Traditions et Changement*, pp. 215–221. Paris: CNRS.  
1996 The Fallout of Deviant Anthropology. *Himal South Asian* 9 (2): 50–1.
- Dracklé, Dorle, and Iain Edgar (eds.)  
2004 *Learning Fields Volume 2: Current Politics and Practices in European Social anthropology Education*, pp. 242–248. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Douglas, Mary  
1995 Forgotten Knowledge. In Marilyn Strathern (ed.) *Shifting Contexts: Transformations in Anthropological Knowledge*, pp. 13–29. London: Routledge.

- Firth, Raymond  
 1951 Contemporary British Social Anthropology. *American Anthropologist* 53 (4): 474–489.
- 船曳建夫  
 1988 「文化と社会」伊藤幹治, 米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』pp. 17–46. 京都: ミネルヴァ書房。
- Gell, Alfred  
 1999 *The Art of Anthropology: Essays and Diagrams*. London and New Brunswick: the Athrone Press.
- Goody, Jack  
 1995 *The Expansive Moment: The Rise of Social Anthropology in Britain and Africa, 1918–1970*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hart, Keith  
 2003 British Social Anthropology’s Nationalist Project. *Anthropology Today* 19 (6): 1–2.  
 2004 Epilogue. In Dorle Dracklé and Iain Edgar (eds.), *Learning Fields Volume 2: Current Politics and Practices in European Social anthropology Education*, pp. 242–248. New York and Oxford :Berghahn Books.
- Humphrey, Caroline  
 1985 Barter and Economic Disintegration. *Man* (N.S.) 20 (1): 48–72.  
 1992 Fair Dealing, Just Rewards: The Ethics of Barter in North-East Nepal. In Caroline Humphrey and Stephen Hugh-Jones (eds.) *Barter, Exchange and Value: An Anthropological Approach*, pp. 107–141. Cambridge: Cambridge University Press.
- Humphrey, Caroline and James Laidlaw  
 1994 *The Archetypal Actions of Ritual: A Theory of Ritual Illustrated by the Jain Rite of Worship*. Oxford: Clarendon Press.
- Hutton, J. H.  
 1946 *Caste in India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ingold, Tim (ed.)  
 1996 *Key Debates in Anthropology*. London and New York: Routledge.
- Kuper, Adam  
 1988 *The Invention of Primitive Society: Transformations of an Illusion*. London: Routledge.  
 1996 *Anthropology and Anthropologists: The Modern British School*, 3rd edition. London: Routledge.
- Kuper, Adam (ed.)  
 1992 *Conceptualizing Society*. London and New York: Routledge.
- Kuklick, Henrika  
 1991 *The Savage Within: The Social History of British Anthropology, 1885–1945*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leach, Edmund R.  
 1984 Glimpses of the Unmentionable in the History of British Social Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 13: 1–23.
- Macdonald, Sharon  
 2001 British Social Anthropology. In Paul Atkinson, Amanda Coffey, Sara Delamont, John Lofland, and Lyn Lofland (eds.), *Handbook of Ethnography*, pp. 60–79. London: Sage.
- Macfarlane, Alan  
 1976 *Resources and Population: A Study of the Gurung of Nepal*. Cambridge: Cambridge University Press.
- マクファーレン, アラン  
 1990 『イギリス個人主義の起源—家族・財産・社会変化』酒田利夫訳, 東京: リプロポート。  
 2001 『イギリスと日本—マルサスの畏から近代への跳躍』船曳建夫監訳, 東京: 新曜社。
- Macfarlane, Alan, Sarah Harrison, and Mark Turin  
 2005 Anthropological and other ‘Ancestors’: Notes on Setting up a Visual Archive. *Anthropology News* 46 (9): 21–22.
- Mills, David

名和 イギリス「社会」人類学の内実をめぐって

- 2003a Quantifying the Discipline: Some Anthropology Statistics in the UK. *Anthropology Today* 19 (3): 19–22.
- 2003b Professionalizing or Popularizing Anthropology?: A Brief History of Anthropology's Scholarly Associations in the UK. *Anthropology Today* 19 (5): 8–13.
- Moore, Henrietta L. (ed.)  
1996 *The Future of Anthropological Knowledge*. London: Routledge.
- Moore, Henrietta L., and Todd Sanders (eds.)  
2006 *Anthropology in Theory: Issues in Epistemology*. Malden and Oxford: Blackwell Publishing.
- Murdock, George Peter  
1951 British Social Anthropology. *American Anthropologist* 53 (4): 465–473.
- 中根千枝  
1987 『社会人類学—アジア諸社会の考察』 東京：東京大学出版会。
- Pignède, Bernard  
1993 *The Gurungs: A Himalayan Population of Nepal*. English edition by Sarah Harrison and Alan Macfarlane. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- Sillitoe, Paul  
2003 Time to be Professional? *Anthropology Today* 19 (1): 1–2.
- Spencer, Jonathan  
2000 British Social Anthropology: A Retrospective. *Annual Review of Anthropology* 29: 1–24.
- Stocking, George Jr.  
1995 *After Tylor: British Social Anthropology, 1888–1951*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Stocking, George Jr. (ed.)  
1984 *Functionalism Historicized: Essays on British Social Anthropology (History of Anthropology, volume 2)*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Strathern, Marilyn  
1988 *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.  
1995 The Nice Thing about Culture is that Everyone Has It. In Marilyn Strathern (ed.) *Shifting Contexts: Transformations in Anthropological Knowledge*, pp. 153–176. London: Routledge.  
2005 *Kinship, Law and the Unexpected: Relatives Are Always a Surprise*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ストラザーン, マリリン  
1987 「自然でも文化でもなく—ハーゲンの場合」 木内裕子訳, 山崎カヲル監訳 『男が文化で女が自然か?—性差の文化人類学』 pp. 209–281, 東京：晶文社。
- Strathern, Marilyn (ed.)  
2000 *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics and the Academy*. London and New York: Routledge.
- Urry, James  
1985 W. E. Armstrong and Social anthropology at Cambridge 1922–1926. *Man* (N.S.) 20: 412–433.
- Watson, Graham  
1984 The Social Construction of Boundaries between Social and Cultural Anthropology in Britain and North America. *Journal of Anthropological Research* 40 (3): 351–366.
- 山下晋司編  
2005 『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ20のモデル』 東京：弘文堂。